

令和2年度
野洲市文化財調査概要報告書

二〇二一年三月

滋賀県野洲市教育委員会

令和2年度
野洲市文化財調査概要報告書

2021年3月
滋賀県野洲市教育委員会

令和 2 年度
野洲市文化財調査概要報告書

2021 年 3 月
滋賀県野洲市教育委員会

序 文

野洲市は、琵琶湖の南東側に位置し、野洲川と三上山に代表される自然環境豊かな市です。考古学上では、大岩山出土の24個の銅鐸をはじめ、大岩山古墳群や西河原遺跡群出土木簡などが広く知られ、ほかにも貴重な遺跡が市内各地に点在しています。

本書は、令和2年度に実施した文化財関係調査の概要報告書です。

本報告書に所収する主な調査成果では、妙光寺古墳群山頂支群の踏査があります。

また、小比江に位置する台見寺所蔵の太鼓の記録保存調査を、地元の有志の方々のご協力を得て実施しました。

その他、二之宮神社境内の庭園遺構や野洲市内出土の古代鬼瓦について、その再検討を実施しました。

これらの成果を収録した本書が、郷土の歴史と文化財への理解に寄与できれば幸いと存じます。なお、調査を実施するにあたりまして、多くの方々にご協力をいただきました。お世話になった皆様方に厚くお礼を申し上げますとともに、本市の文化財保護行政に今後ともご理解を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年（2021）3月

野洲市教育委員会

教育長 西 村 健

例 言 ・ 凡 例

1. 本書は、令和2年度に実施した、野洲市内の文化財調査の概要報告書である。
2. 調査は野洲市教育委員会文化財保護課が実施した。調査の体制は以下のとおりである。

令和2年度

教育長 西村 健

教育部長 杉本 源造 教育部次長 田中 源吾 教育部次長 進藤 武

文化財保護課長 進藤 武(兼務) 課長補佐 河合 順之

課長補佐 福永 清治

技師 井上 竜也 技師 岡山 仁美 技師 芦塚 晶太

3. 本書の執筆は、調査補助員の協力を得て、文末に記した担当者がおこなった。
編集は課員の協力のもと芦塚がおこなった。
4. 現地調査における基準方位は、特に設定しない限り磁北を示す。
5. 標高は、野洲市公共下水道台帳図の水準を基準としている。
6. 遺構の表示記号は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の略号を準用した。
7. 遺跡名や遺跡範囲については、『野洲市遺跡地図』（野洲市教育委員会 令和2年12月7日改訂）による。
8. 土色は、「新版標準土色帖」（1993年版）などを参考にした。
9. 出土した遺物および記録などは、野洲市教育委員会で保管している。
10. 現地調査および整理作業は、下記の方々の参加・協力を得た。

妙光寺自治会

台見寺関係者 藤澤 善成 藤澤 洋子 小川 嘉夫 藺田 泰三 藺田 嘉弘

野洲市環境基本計画推進会議自然・山部会（えこっちやす）

野洲市歴史民俗博物館 江藤 弥生

山崎 馨 大黒 康弘 松下 嘉暢 中川 九英

目 次

序 文

例 言 ・ 凡 例

目 次

第1章 妙光寺古墳群—山頂支群の踏査— 1

第2章 小比江台見寺所蔵の太鼓について 16

第3章 二之宮神社境内の庭園遺構について 24
～比利多神社、養因寺との関係を中心に～

第4章 野洲市内出土の古代鬼瓦について 34

報告書抄録

第1章 妙光寺古墳群 ―山頂支群の踏査―

調査日 令和2年6月10日・11月11日・11月18日

調査場所 野洲市妙光寺

調査目的 妙光寺古墳群の山頂支群の実態把握

調査方法 写真撮影を行いながら踏査し、石室の法量の計測及び墳丘の測量を行った。

調査の経過 野洲川中流域右岸の南東には、三上山、妙光寺山、田中山、鏡山といった山々と200～400m級の丘陵が南西から南東に連なっている。妙光寺山は標高267m、北麓が緑色チャート、南麓が花崗岩からなる。妙光寺古墳群は妙光寺山の山頂から南麓一帯にかけて分布する古墳群で、6世紀末から7世紀前半の群集墳が数多く点在している。旧野洲町が実施した分布調査では、68基の古墳が報告され、山頂支群（2基）・宗泉寺支群（14基）・三上神社支群（33基）・東光寺支群（19基）の4つの群に分けられている（野洲町教育委員会1983『野洲町内遺跡分布調査報告書』）。いずれも横穴式石室をもつ後期古墳で、麓に位置するものは墳丘が比較的しっかりしており、石室には主に花崗岩が使用されている一方、傾斜地に位置する古墳の石室は麓に位置する古墳と比べると規模が小さく、付近の山から産出するチャートが使用されており、築造された場所によって石室などの内容にかなりの差が認められる。

旧野洲町の分布調査以降、妙光寺古墳群の調査は行われず、現地も草木が生い茂る状態が続いていた。そのような状況のなかで平成20年に立ち上がった里山保全活動団体「野洲市環境基本計画推進会議自然・山部会」の環境整備の活動により、妙光寺山の山頂付近にこれまで認識をしていなかった数多くの古墳が存在することが明らかになった。そのため、妙光寺古墳群山頂支群の実態把握のため、踏査を行った。

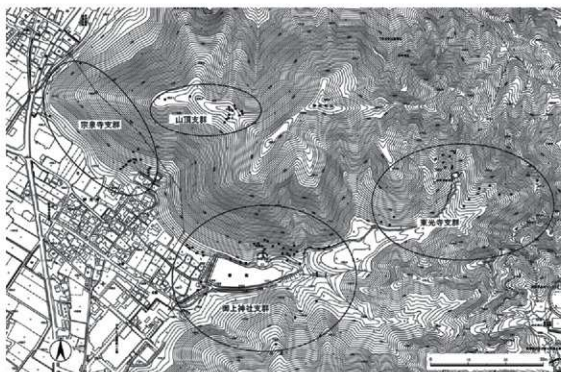


図1 妙光寺古墳群位置図

調査結果 調査の結果、新たに12基の古墳を確認することができた。いずれも妙光寺山の尾根上に分布している。これにより、山頂支群は従来報告されているものと合わせて14基となる(図2)。ほとんどの古墳で墳丘が崩れ、石材が露呈していた。以下で各古墳の概要を述べる。

1号墳 天井石と側壁の一部が露呈しているが、墳丘は山状の高まりとして確認できる。石室内はかなりの土砂で埋もれており、現状での高さは約0.5mである。玄室の長さ3.1m、幅1.16mを測る。奥壁から見て右片袖式石室の可能性ある。天井石は3枚のうち2枚が残存している。石室の主軸は北西(N40°W)である。

2号墳 玄室の開口部が露呈している。奥壁から見て左片袖式の石室で、玄室の長さ2.88m、幅1.8m、玄門部の幅は1.1mを測る。玄室の残存状態は良好で現状の高さ1.5m以上、奥壁・側壁ともに横積にした6段以上の石材が確認でき、持ち送りが強い。天井石は4枚で、石室の主軸は真西(N90°W)である。

3号墳 天井石と側石の一部が露呈しており、石室内はかなりの土砂に埋もれている。玄室の長さ2.15m、幅1.1mを測る。天井石は4枚のうち2枚が残存している。石室の主軸は北西(N30°W)である。

4号墳 天井石と側石が露呈しているものの、玄室内の残存状態は良好で現状の高さは約1.5mである。奥壁から見て右片袖式の石室で、玄室の長さ3.05m、幅1.88m、玄門の幅1.0m、袖部の幅0.75mを測り、山頂支群の中では大きい部類である。持ち送りが強く、奥壁・

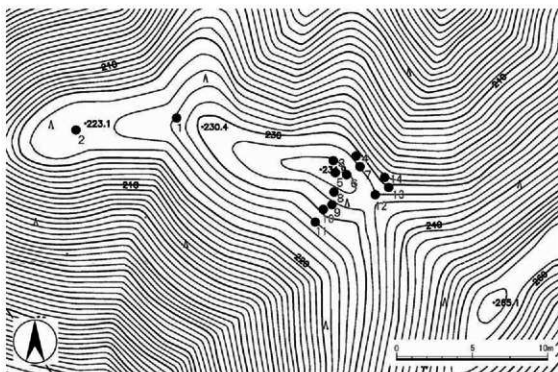


図2 山頂支群分布図

側石は6段以上の石材が積れている。天井石は5枚で、うち2枚が玄室内に陥没している。石室の主軸は北東(N46°E)である。

5号墳 玄室の天井と側石の一部が露呈し、石材が周辺に散在している。石室内はかなりの土砂で埋もれており、現状の高さは約0.5mである。奥壁から見て右片袖式の石室で、玄室は長さ2.05m、幅1.0m、袖部の幅0.26mを測る。天井石4枚のうち2枚が陥没している。石室の主軸は北北東(N10°E)である。

6号墳 天井石及び側石の一部が露呈している。奥壁から見て右片袖式の石室で、玄室の長さ1.58m、幅0.57m、玄門部の幅0.43mを測るやや小ぶりの石室である。天井石は3枚のうち2枚が残存する。石室の主軸は南西(S36°W)である。

7号墳 残存状況が非常に悪く、石材が散在しているのみで石室の法量は不明である。石室の主軸はおそらく北東(N70°E)である。

8号墳 山頂支群の中で最も残存状況が良く、古墳の封土が良好な状況で保たれている。直径約15.0mの円墳で墳丘の北～東側にかけて幅約3.0mの周濠が巡っているが、西側では周濠は確認できない。南～西側は傾斜地となっており、元々周濠が築かれていない可能性が考えられる。墳丘の規模は妙光寺古墳群の中でも大きい部類に含まれ、山頂支群の首長クラスの古墳であると考えられる。南で石室の開口部が一部露呈しており、石室の主軸は北

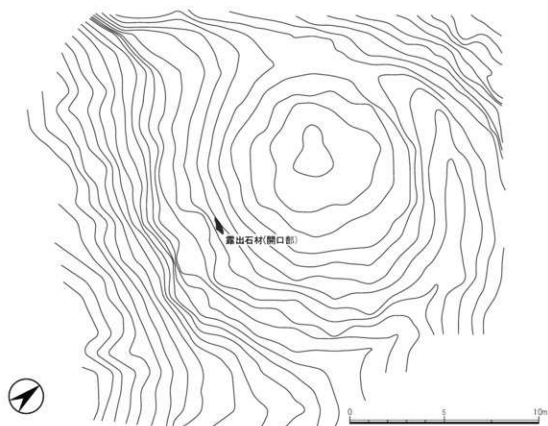


図3 8号墳測量図

北東(N20°E)である。

9号墳 石室の開口部の一部が露呈しており、墳丘の盛土が少し残存している。玄室の長さ2.9m、幅0.95mを測り、北北西(N15°W)に開口する。羨道は長さ1.85mまで確認できる。天井石は4枚で、袖石は確認できない。

10号墳 開口部と天井石の一部が露呈している。玄室の長さは3.1m、幅は0.8mを測り、袖石は確認できない。石室内は土砂で埋もれているが、残存状態は良好で、奥壁・側壁ともに3段以上の石材が積まれていることが確認できる。石室の主軸は北北西(N20°W)である。

11号墳 天井石が露呈しており、残存状態は悪い。玄室の長さは2.8m、幅0.9mを測る。天井石は4枚である。石室の主軸は北北西(N10°W)である。

12号墳 石室の一部が露呈するが、墳丘の封土は比較的良好に保たれている。墳丘の規模は約10.4mである。奥壁から見て右袖式の石室で、玄室の長さは2.7m、幅0.7m、羨道部の幅0.48mを測り、羨道部は長さ1.4mの位置まで石材が残存する。石室の主軸は北東(N60°E)である。

13号墳 墳丘の盛土は残存しているものの石室は露呈しており、石室そのものの残りは悪い。墳丘の規模は約12.0mである。奥壁から見て左片袖式の石室で玄室の長さは推定2.7m、幅0.7mを測る。羨道部は2.1mまで残存している。天井石4枚は崩壊している。石室の主軸は北東(N60°E)である。

14号墳 残存状態は悪く、石室が露呈している。玄室と羨道の区別が難しく、玄室と残存している羨道を合わせた長さは2.6mである。幅は0.8mで、石室の主軸はほぼ真西(N80°W)である。

まとめ 今回の調査では、その成果の第一として新たに12基の古墳を確認したことである。これにより、山頂支群は14基となり、宗泉寺支群に匹敵する数となった。ここでは詳しくは述べないが、同じ山頂支群であっても、分布や石室の主軸の向きからさらにいくつかの群に分けることができそうである。

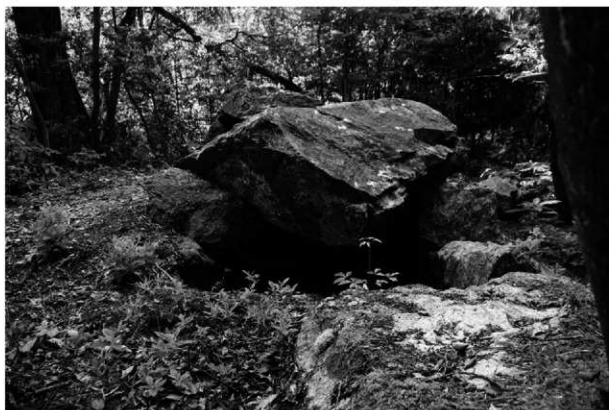
8号墳は墳丘はかなり良好な状態で保たれており、その規模から山頂支群の首長墳と考えられる。石室の法量は判明している中では4号墳が最大で、立地的には8号墳よりも高い位置に築かれていることから、4号墳も首長墳の可能性がある。全体的にみると、石室は3mに満たないものが多く、小ぶりである。

妙光寺古墳群の調査はまだ手付かずの部分が多く、未解明部分が多い。野洲市の古墳時代後期の動態を明らかにするために、今後も継続して調査をする必要がある。

(芦塚)



1号墳（南東から）



1号墳開口部



2号墳開口部



2号墳奥壁



3号墳（西から）



4号墳（南東から）



4号墳（開口部）



4号墳（奥壁）



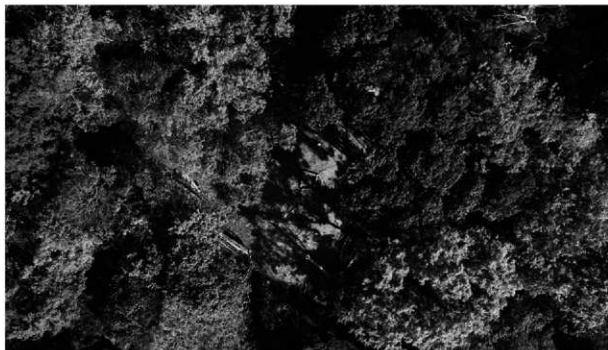
5号墳（南から）



6号墳（北から）



7号墳（南東から）



8号墳（上空から）



8号墳（北から）



8号墳開口部



9号墳開口部（南西から）



9号墳玄室



10号墳玄室



11号墳（北から）



12号墳丘（南から）



12号墳（南西から）



13号墳（東から）



14号墳（南西から）

第2章 小比江台見寺所蔵の太鼓について

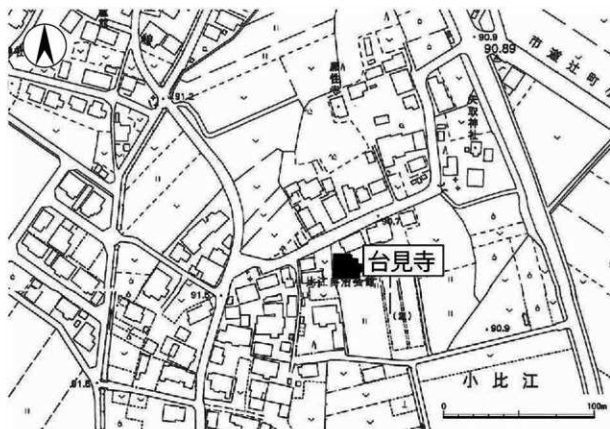
調査地 野洲市小比江52

調査期間 令和2年9月16日

調査経過 小比江所在の台見寺が所有する太鼓の皮の破損箇所から、胴内の墨書が確認できる旨について台見寺関係者から一報を受けた。調査の依頼および今後の保管等の検討を含め岡山（野洲市文化財保護課）と江藤（野洲市歴史民俗博物館）の2名が現地で資料の確認及び聞き取り調査を行った。調査の実施にあたっては、台見寺住職をはじめとする地元の有志の方々の協力を得た。

台見寺 真宗木辺派台見寺の創建は不詳である。元来、字杉村（現小比江自治会館あたり）に位置した。昭和15年9月当時に住職を務めた村松秀隆は、光念寺（江部）から長らく無住であった台見寺に藤澤了義（安政3年～大正7年）が移り、住職として明治21年（1888）に当地にて再興したと伝える。当寺は、かつて火災に見舞われたことがあるという言い伝えが確認でき、それが起因するかどうかは不明であるが現存する寺の什物はそれほど多くない。現在、檀家数は7軒である。

本尊は、阿彌陀如来立像で、左脇陣に親鸞聖人真影、聖徳太子と七高僧の真影が安置される。また、右脇陣には錦織寺中興の良慈上人真影、藤澤了義筆の六字名号が安置される。梵鐘は、戦争の供出によって不在になり、現在は「臺見寺什物 昭和廿五年一月」「江州辻村 鋳物師太田辨蔵」という銘が確認できる半鐘を吊るしている。



第1図 台見寺位置図

太鼓 境内に太鼓楼は無く、近年まで本堂の縁側に吊られていた。胴部全長は 79.0cm、胴部円周は 246.0cm の長胴太鼓である。胴部最大径は 78.3cm で、小口径が 60.0cm（小口円周 89.0cm）であり、比較的、胴の中央が張り出した形状に作製されている。胴部に合計 4 か所（2 個並びが 2 か所）の環が打ち付けられる。櫓を用いており、胴部の木目が美しい。現在は両面ともに皮が破れた状態である。皮を張って釘打ちした後、余分な皮を切り取る工程で胴部に残る刃物の使用痕もうっすらとみえることから、複数回に及ぶ皮の張り替えが確認できる。胴内の割り抜きは、中央部分を丸ノミで横彫りして成形した後、両小口付近を開口部から縦彫りにしている。

胴内には、「二尺分貫」という墨書が確認できる。二尺は、小口直径の実測と近似値であることから、胴内の割り抜き分を示していると考えられる。そのほかにも、以下の墨書が確認できる。

- | | | |
|--|---|--|
| ③ 「天保七歳 申三月吉日
嶋之郷 林村
張主源七」 | ② 「文政十一歳戊子三月吉日
江州八幡嶋之郷
林村太鼓屋七郎兵衛（花押）」 | ① 「文政四年己三月吉日
嶋之郷太鼓屋
作主 七郎兵衛（花押）」 |
| ⑥ 「大正七年十月廿二日
蒲生郡大林村
太鼓屋 七郎 □ □ 張替」 | ⑤ 「慶応二年 寅二月十七日
江州野洲郡 和田村
太鼓屋山城屋」 | ④ 「天保十二歳 丑五月吉日
嶋之郷林村
張替源七（花押）」 |

ほとんどが同一方向の縦書きで記されるが、大正年間の墨書のみ反対方向の縦書きとなっている。文政年間および天保年間に見える「嶋之郷林村」（現近江八幡市内、林村からのち大林村となる）は、太鼓づくりの盛んな地域であり、「太鼓屋七郎兵衛」は、小南の皆込小路・堤の法専坊・市三宅の個人宅・江部の光念寺・大篠原の念佛寺が所有する太鼓にもその名が記される。また、胴外（釘止め付近の皮部分）にも「昭和参拾参年四月張替八日市市御園町 太鼓商 藤谷善四郎」の墨書が確認でき、皮の張替後に追記されたことが分かる。

胴内および胴外に記された上記の墨書から、当該資料は文政 4 年（1821）に作製され、

文政11年(1828)、天保7年(1836)、天保12年(1841)、慶應2年(1866)、大正7年(1918)、昭和33年(1958)の6回は少なくとも張り替えが施されたと確認できる。天保12年以前は、最短5年ほどで頻繁に張り替えているのに対し、後年は、数十年をまたいで張り替えが施されていることから、徐々に使用回数や強打が減少したことが予想される。なお、現在、台見寺では1月1日の修正会に始まり、歓喜会(8月15日)、報恩講(8月下旬)、彼岸会(9月)などの行事がおこなわれるが、近年は法要などで太鼓を使用することは無く、参集時の触れ太鼓として使用していたとのことである。当該資料の墨書は、修復履歴を示すだけでなく、明治21年に再興される以前の台見寺の歴史の片鱗をうかがうことができる貴重な資料といえる。

(野洲市歴史民俗博物館 江藤弥生)

<参考資料>

- ・『市史編さんだより』第13号・第14号・第15号・第18号・第22号・第37号・第38号・第39号(野洲市歴史民俗博物館 平成19年～平成26年)
- ・『令和元年度野洲市文化財調査概要報告書』(野洲市教育委員会 令和2年3月)
- ・台見寺作成資料



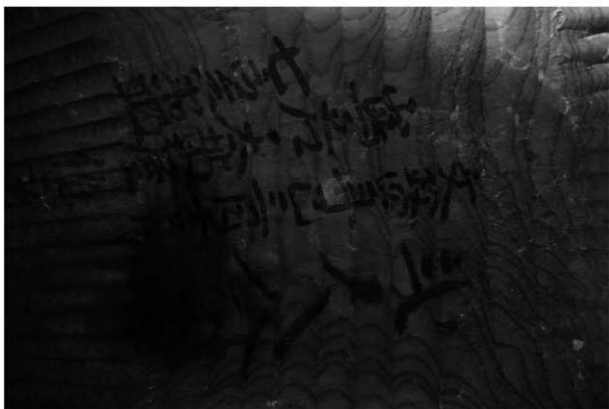
台見寺遠景



調査対象の太鼓



胴外の墨書部分



墨書①



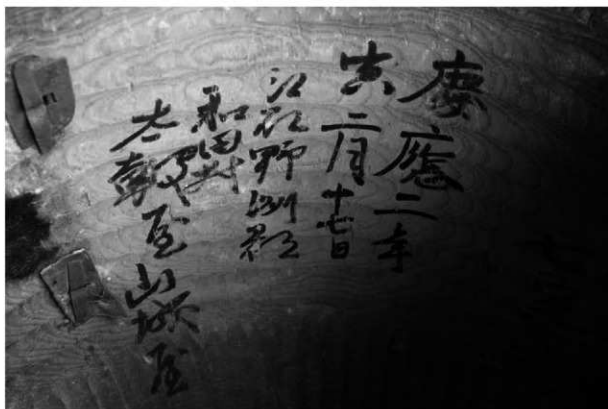
墨書②



墨書③



墨書④



墨書⑤



墨書⑥



太鼓掛部



半鐘



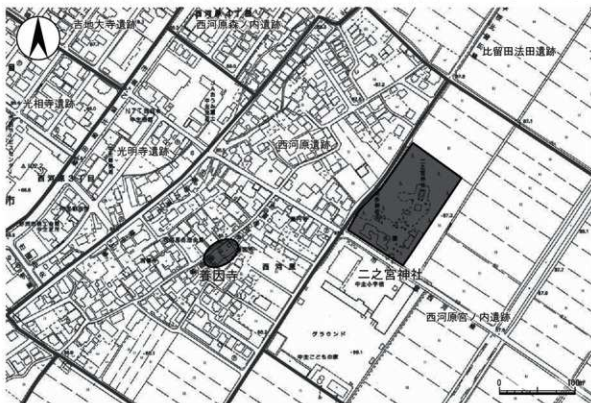
銘「江州辻村 鋳物師太田辨蔵」

第3章 二之宮神社境内の庭園遺構について ～ 比利多神社、養因寺との関係を中心に ～

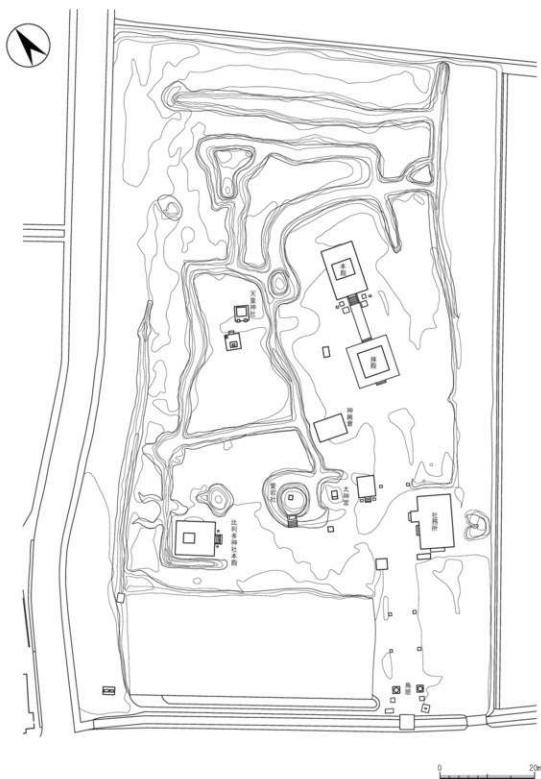
はじめに 二之宮神社(写真1)は野洲市西河原字宮ノ内に所在する神社で(第1図)、社伝には「欽明天皇の朝鎮座、養老二年はじめて社殿を造営す」とあり、それを信ずるならば飛鳥時代に遡る。兵主神社二十一社の中七社のうち、第二社に相当することから二之宮大明神と称し、天児屋根命、経津主命の二座を祭神とする⁽¹⁾。

境内地は約13,000㎡と広く、境内社として明治43年(1910)に合祀された天皇社など6社と、式内社で建久年中に比留田から現地に遷座したという比利多神社(写真2)がある。境内地西端には噴水を有する方形の池(写真3)があるが、これは昭和10年代の学校建設時の土取りによってできたものである⁽²⁾。また、社殿背後には樹木の生い茂った広大な空間があり、ここに複雑な水路状の痕跡が存在している。この水路状の痕跡について、村岡正氏は「現状でははっきりわからないが、案外古い遺水跡かもしれない」と指摘しておられ⁽³⁾、昭和62年(1987)に実施された測量調査および試掘調査によって庭園跡であることが確定した。この時の調査成果は平成23年度に纏められている⁽⁴⁾が、その中で触れられていない問題点がこの度浮かび上がってきたので、それについて、現状から推察できることを報告する。

庭園遺構の概要 二之宮神社境内の庭園遺構は、前述した昭和62年の測量調査と試掘調査によって、全体像がおおよそ判明している(第2図)。測量成果から、境内地は二重の堀に囲まれており、土塁状の痕跡も残されている。その二重の堀を経由して庭園内に引水されていたとみられ、内堀北西辺から水路へ引水し、南東辺から内堀を経由して排水していたと考えられる。



第1図 二之宮神社位置図



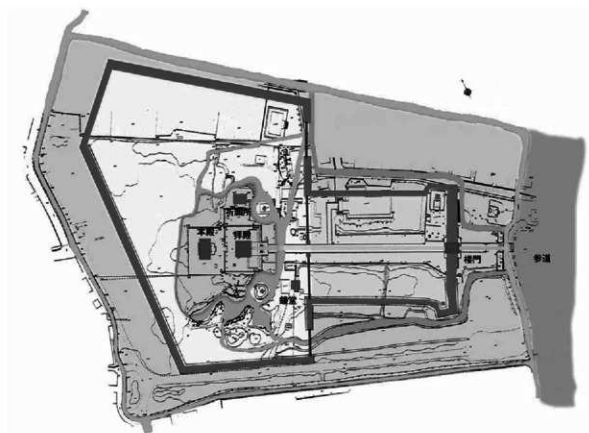
第2図 二之宮神社境内庭園遺構測量図

境内南西端は前述した広大な方形池の存在もあり、大きく改変されているため、水路の有無は不明だが、この付近にもかつてそうした水路跡が存在した可能性は存在する。水路跡は曲流するものや直進するもの、社殿を「コ」の字型に囲むものなどがあり、複雑である。また、円形や方形の島状の痕跡も認められる。試掘調査の結果、愛宕社と太神宮が鎮座する高まりは、それぞれ円島と隅丸方島であることが確認され、その付近の水路は幅約1.2～1.8m、深さ約0.3mを測る。粘土で貼底が施されているほか、島側の岸には円礫が貼り付けられていた。出土遺物は土師皿が90%以上を占め、その他に須恵器、陶磁器、黒色土器、瓦などがある。粘土による貼底の上層と下層で出土遺物の年代は異なっており、上層は15世紀後半～16世紀初頭、下層は12世紀末～15世紀前半のものが多い。このことから、作庭年代は12世紀末で、その後、15世紀後半から16世紀初頭に再整備が行われたものとみられる⁽⁵⁾。

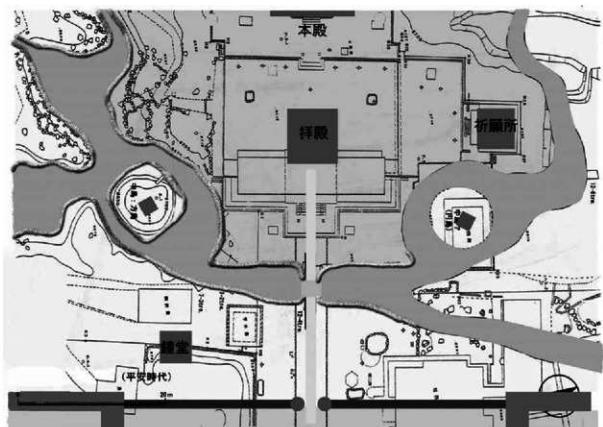
庭園遺構の性格 本稿で取り上げる二之宮神社境内の庭園遺構(写真4～7)は、神社に伴う庭園として希少なものである。神社に庭園が伴う例は、市内では兵主神社、県内では多賀野多賀大社、同胡宮神社などがあるが、多くは社務所に伴う庭園で、観賞用の庭といった風情が強い。それらの中で、本庭園と兵主神社庭園は趣を異にしているが、その分、その性格については様々な問題をはらんでおり、なお検討の余地がある。兵主神社庭園は、『兵主大明神縁起』によると地元豪族であった五条播磨守資頼の邸内に兵主大明神が迎えられ、豪族の居館内にあった庭が残ったものと伝えられている。兵主神社庭園は平成2年の台風19号で大きな被害を受けたことに伴い、平成3年度から11年度にかけて保存修理事業を実施している。その中で庭園の発掘調査が行われ、全容と変遷が明らかになっている⁽⁶⁾。庭園を含めた境内地の土地利用は現代にいたるまで大きく変化し続けているが、庭園の当初の構造を見ると、神域を意識した構造となっている(第3図・第4図)。二之宮神社庭園についても、現在の社殿と水路の位置関係がうまく調和していることから、同様と考えられる。神社庭園、特に「神苑」についての研究は、調査事例のみならず、「神苑」そのものの遺存事例の少なさからさほど進んでいないと考えられるが、本稿においては、紙幅の都合および報告書という掲載媒体の性格から「神苑」がどういうものかという点について深く考察することはせず、神社庭園のうち、社務所庭園のような観賞を主目的とする庭園でないものを「神苑」と捉え、社殿を意識した水路配置が見られる二之宮神社庭園もまた「神苑」であると推察するととめておく。

ところで、昭和62年度の調査報告において、調査者は「まとめ」で問題点を列記するのみに留め、それらの問題点について考察を加えることはしていない。現時点での類例の少なさから、それら一つ一つについて考察を加えるのは難しいと思われるので、その点はむしろ妥当であると思われるのだが、その中で触れられていない問題2点について、本稿では考察を加えたい。その2点とは、①境内社である式内社比多神社と庭園遺構の関係、②同地に所在したとされる神宮寺との関係である。

問題点① 比多神社は二之宮神社の境内社であるが、当初は野洲郡比留田村(現野洲市比留田)にあり、「神威殊に荒々しきを以て村民守護しかね」て建久年中に西河原へ移転し、二之宮神社の境内社に収まったという⁽⁷⁾。建久は1190年から1199年まで使用された元号で、社伝を信するならば、比多神社が同地に遷座したのは12世紀末となる。庭園遺構からは先述したとおり、異なる2時期の遺物が出土しているが、そのうち下層出土遺物は12



第3図 兵主神社庭園想定復元図



第4図 兵主神社庭園社殿前遺構復元図

世紀末～15世紀前半の所産であり、比利多神社の伝承上の遷座時期と合致する。測量図を見ると、現在の比利多神社社殿を囲むような形で水路が廻らされているが、水路は社殿の基壇に沿うように設けられており、二之宮神社社殿周辺と違って空間に余裕がない。また、比利多神社社殿の脇には小さな高まりがあり、これがいつの所産かは判然としないが、もし、池中に設けられた島の名残であったとすると、この付近は社殿を設けるべき空間ではなかったことになる。出土遺物から、少なくとも一度は庭園の再整備が行われていることは確かであり、かつ境内地南側における庭園遺構の存在が明確でない現状から考えると、比利多神社の社殿が当初から現位置に存在したのかどうかは疑問が生じるが、社伝における比利多神社の遷座時期と、庭園の作庭時期が合致する点は重要である。比利多神社の遷座を契機に境内が整備され（この整備自体も再整備の可能性はある）、「神苑」として現在残る庭園が作庭された可能性は考えてよい。

問題点② 野洲市西河原の集落内に所在する養因寺は、寺伝によれば養老年間（717～723年）に行基によって創建された道場に始まり、元は二之宮神社の神宮寺で、当寺の住職が神司を兼務していたという。当初は天台宗で、室町時代に藤井税介房泰の五男・行國が出家して叡山で修行したのち当寺に住み、蓮如上人に帰依したことで真宗に転じたとされる。現寺号となったのは永正七年（1510）、釈了西による中興を契機とする⁽⁹⁾。

現在、二之宮神社境内の南西隅に神宮寺跡であることを示す石碑が建立されているが、この石碑は養因寺によって建立されたもので、内容は養因寺の寺伝の要約である（写真6）⁽⁹⁾。神宮寺は神仏習合思想に基づき建立された寺で、多くは神社の境内に立てられ、社僧が住した⁽¹⁰⁾。現養因寺は二之宮神社から直線距離で約250m離れており（第1図）、二之宮神社境内がこの付近まで広がっていたわけではないことは前述した境内地および周辺の調査から明らかである。したがって、石碑に刻まれている通り、神宮寺は二之宮神社の境内に所在したと考えるのが妥当であるが、前述の調査は庭園遺構の調査を主体として行っており、かつ発掘調査が境内地全体に及んでいないことから、神宮寺の存在を示す遺構は検出されていない。ただし、出土遺物に瓦が含まれていることから、瓦葺きの建物が存在したことは推定でき、通常、神社建築は瓦葺きではないことから、仏堂などと考えられるが、明確な建物遺構が検出されていない現時点では、推測の域を出ない。

神仏習合思想から、神宮寺が存在したとしてもおかしくはない。しかし、現在判明している、二之宮神社境内の土地利用からは、七堂伽藍を有するような、大規模な寺院の存在は浮かび上がってこない。現在の二之宮神社は、庭園の水路の配置からおそらく旧状を保っていると考えられ、全容が明らかでない部分はあるにしても、もし仮に神宮寺が存在したとしてもそれほど大規模な寺院ではなく、持仏堂程度の規模であった可能性が高い。

もし、持仏堂程度の規模であったとしても、神宮寺が存在したとすれば、境内のどこに建立されていたのだろうか。測量図を見ると、境内地全体に水路が張り巡らされており、敷地の広さの割に建物が建てられる空間が少ないことがわかる。二之宮神社境内が当初から現在と同じ規模であったとするならば、現在は池となっている境内南西か、社務所のある南東の一角しか閑閑地が存在しないため、もし神宮寺が存在したとすれば、この付近であった可能性が高い⁽¹¹⁾。

小 結 以上、二之宮神社庭園の調査成果を基に、昭和62年度の調査報告で触れられていなか

った問題点2点について考察を加えた。二之宮神社については、先の一連の調査で庭園の全貌はほぼ明らかになってはいるが、境内全体の土地利用についてはなお不明な点が残る。資料の制約等もあり、本稿では推測に推測を重ねることになった。今後、二之宮神社境内や周辺地で発掘調査が実施され、神社周辺の土地利用が明らかになると、おのずと明らかとなると考えられる。

(井上)

【註】

- (1) 辻弘編 1978『中主町史』中主町教育委員会。
- (2) 辻広志 2012「第7章 二之宮神社境内の調査」『平成 23 年度野洲市埋蔵文化財調査概要報告書2』野洲市教育委員会文化財保護課。なお、同報告は昭和 62 年度に開催された発掘調査現地説明会の資料を一部改変のうえ転載したものである。
- (3) 村岡正 1985『滋賀県の庭園 第3集』滋賀県教育委員会。
- (4) 註(2)に同じ。
- (5) 詳細は註(2)文献を参照のこと。
- (6) 辻広志ほか編 2002『名勝兵主神社庭園保存整備報告書 発掘調査編』中主町教育委員会。
- (7) 註(1)に同じ。
- (8) 石碑の内容は次のとおりである。
「西暦七百四十三年頃、行基菩薩が奈良東大寺建立のため、全国各地に道場を建て募材伝道につとめ、この地にも道場が建てられた。之がこの神宮寺でその後永正七年養因寺に移るまで七百六十八年の長期にわたり、代々兵主二之宮神社に奉斎した。
この地がかような、由緒深い寺址である。」
- (9) 註(1)に同じ。
- (10) 日本史広辞典編集委員会編 2001『新版 山川日本史小辞典』山川出版社。
- (11) ただし、現在の社務所の隣に老人憩の家を建設するにあたり、平成元年に試掘調査を実施しているが、その際、神社あるいは庭園に関連する遺構は検出されていない(辻広志 2006「西河原宮ノ内遺跡第2次発掘調査」『野洲市内遺跡発掘調査集報Ⅵ』野洲市教育委員会)。



写真1 二之宮神社殿

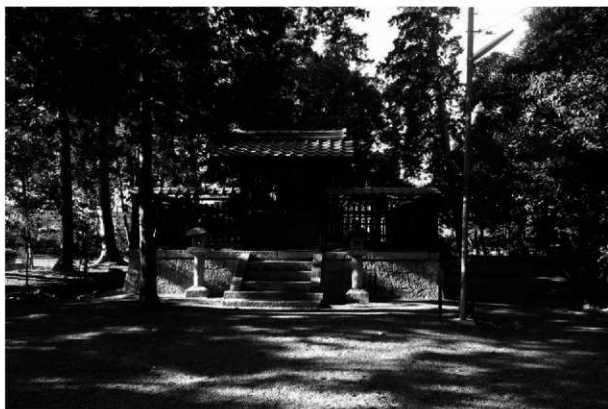


写真2 比利多神社殿



写真3 二之宮神社境内の方池



写真4 二之宮神社境内の庭園遺構（遺水）



写真5 二之宮神社境内の庭園遺構（円島（手前）と方島（奥））



写真6 二之宮神社社殿脇の溝と中島



写真7 比利多神社社殿脇の溝



写真8 二之宮神宮寺跡の石碑（由緒書き）

第4章 野洲市内出土の古代鬼瓦について

野洲市内においては、古代寺院跡として六条薬師堂遺跡、八夫西ノ後遺跡などが周知されている。本稿では、白鳳～奈良期、いわゆる古代の鬼瓦（鬼板）が出土している六条薬師堂遺跡と、八夫西ノ後遺跡について取り上げる。

六条薬師堂遺跡（野洲郡：中主町六条）

六条薬師堂遺跡は、琵琶湖岸より内陸側へ約2kmに位置する自然堤防上に立地する白鳳寺院跡である。野洲市（旧：中主町）六条には、奈良時代初期創建と伝わる兵主神社が所在することから、『近江の古代寺院』では西田弘氏によって「兵主廃寺」と仮称されている。昭和55年より調査され、特に第1次調査では寺院基底部とみられる南北約11m以上×東西約6m以上の高まり（周囲との比高差約0.4m）が検出され、それを囲うように約6mの幅で散乱した瓦類が出土した。出土した瓦類は平瓦、丸瓦、単弁八弁蓮華紋軒丸瓦、偏向唐草紋軒平瓦、鬼瓦である。

鬼瓦1 鬼瓦は1点が出土した。左上部分の破片で、文様は同遺跡で出土した軒丸瓦の範を用いた蓮華紋である。周縁部に方形の剥離痕が残るほか、瓦範を使用した際に接触したと思われる痕跡が方形の剥離痕と蓮華紋の間に存在する。周縁側面は頂点部分に布目痕が残るほか、ケズリ調整により仕上げる。厚みは約3.8cmを測る。色調は灰色、胎土は2mm以下の砂粒が混じり、焼成は良好である。

紋様 同遺跡で出土した軒丸瓦は、基本構成として単弁八弁蓮華紋で外区の圏線上に珠紋を置き、外区外縁に鋸歯紋を配する。突出した中房に1+6+6の蓮子と圏線上に18個配し、花卉表現については八弁のうち中房を中心として十字に配した四弁が花卉内側に3本の凸線を有し、一弁が1本の凸線を有し、残り三弁は花卉の輪郭のみの表現となるものを「Aタイプ」とする。花卉のいずれにも3本の凸線が表現され、中房輪郭を凸線で表し、1+5の蓮子と圏線上に31個の珠紋を配する「Bタイプ」とする。このうち珠紋の有無や蓮子の数・配置など細部の違いでさらに細分される。

このうち、鬼瓦に使用された紋様は珠紋の密度から判断して、珠紋が圏線上に18個配されたAタイプのものであるとみられる。

八夫西ノ後遺跡（野洲郡：中主町八夫）

八夫集落中央部西側に位置し、鵜尾の破片や平瓦片が出土したことや周囲の条理方向と異なる地割が現存することから古代寺院跡の存在が推測されている。

平成13年度（2001年）第10次調査では、第1遺構面（現地表面下0.2～0.3m、標高約88.7～88.8m）において、9～10世紀代を中心とする正方位の掘立柱建物跡4棟やほぼ正方位の区画溝を検出している。区画溝内からは奈良三彩の火舎も出土している。

平成6年度の発掘調査において、287mの調査区で飛鳥・白鳳、奈良時代から平安前期にかけての櫓、土坑、ピット、礎石が検出されている。鬼瓦片のほか平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・隅切瓦なども出土しているが、廃絶後にまとめて廃棄したものとみられている。軒丸瓦については「嵌め込み式法」が製作技法として用いられており、同様の製作技法が

確認されている大津市真野廃寺や、草津市宝光寺跡との関連性が注目される。

寺域を復元するうえでは2パターン想定され、現存する地割から260m四方に想定できるのを第1案として、平成13年度の調査結果で区画溝を検出した成果から120m四方に想定されるのを第2案とする。現実的な規模としては、120m四方の規模が妥当であると考えられるが、想定寺域内における伽藍配置を復元しうる遺構は未検出である。

鬼瓦1 右上部の破片か。厚さ約3.5cmを測り、表面の一部に、断面台形状・厚さ0.5cmの凸帯を弧状に貼り付ける。さらに外側の部分にも剥離痕がわずかに残ることから、2条以上の突帯が貼りつけられていたものとみられる。裏面に立ち上がりの痕跡が指頭圧痕とともに残る。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の微砂粒を含み焼成はやや軟質である。

鬼瓦2 小破片であるため全容は不明である。裏面の立ち上がりからみて、部位としては鬼瓦下部の破片と判断できる。厚さ約3.6cmを測る。色調は灰白色、胎土は2mm以下の微砂粒を含み、焼成は良好である。

まとめ 滋賀県下における古代鬼瓦出土例としては、近江国庁跡の飛雲紋鬼瓦や、小八木廃寺出土の舌出し獣面紋鬼板が広く知られる。それら以外にも各地域で、鬼瓦・鬼板の出土がみられる事例は少なからず存在している。

今回、野洲市内における古代寺院出土鬼瓦として、概要報告にとどまっていた六条薬師堂遺跡と八夫西ノ後遺跡出土例について再度実測し、報告するに至った。

六条薬師堂遺跡については、「兵主廃寺」として、寺院基底部とみられる高まりとそれを囲むように散乱した瓦片が、昭和55年頃からの調査で遺物整理用コンテナ約260箱分出土していることから、薬師堂の存在が推察されている。寺域を想定すると、当遺跡の南側に面する道が六条の集落内へと続き、東西方向の地割が現存していることや、六条自治会館付近で南北方向の地割が認められることから、約220m四方の寺域が存在した可能性を提示したい。ただ、現時点ではあくまでも現存する地割に基づいた推測の域は出ない。

八夫西ノ後遺跡については、「八夫廃寺」として、その寺域は現存する地割や、既往の調査成果から復元できる。伽藍配置を復元しうる遺構は検出されていないが、遺物としては軒瓦・奈良三彩をはじめとする寺院関連の遺物が少なからず出土している。古代寺院が存在していたことは確実であり、今後想定寺域内における発掘調査成果に期待したい。

本稿の執筆にあたり、大津市埋蔵文化財調査センター・青山均氏にご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

(岡山)

発掘調査報告書

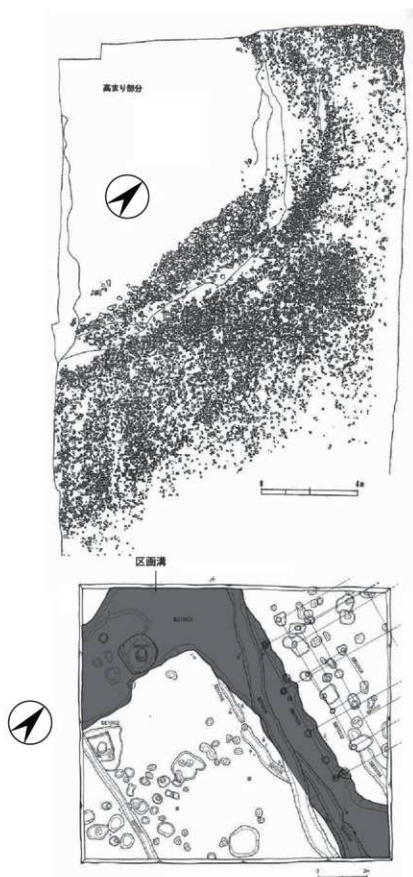
中主町教育委員会 1997『平成6・7年度中主町内遺跡発掘調査年報』

野洲市教育委員会 2006『野洲市内遺跡発掘調査集報Ⅱ』

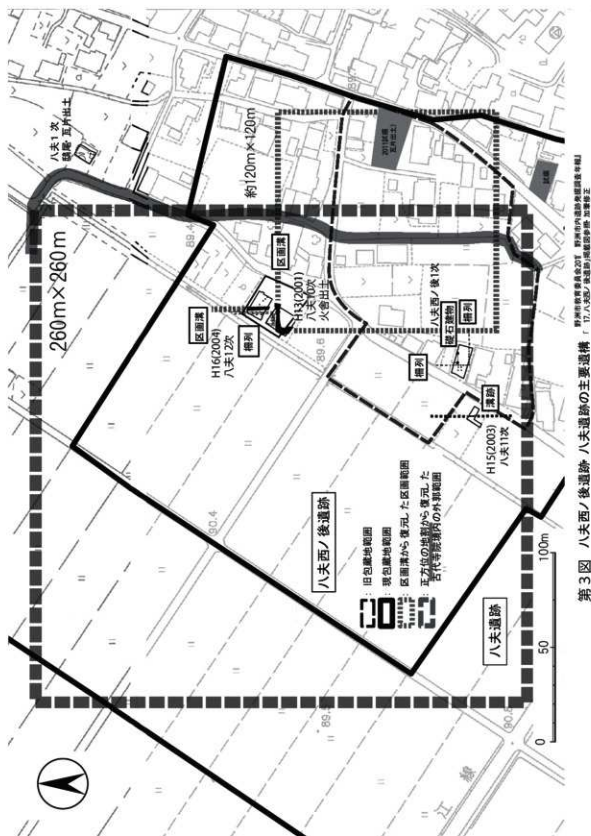
図版出典

第4図拓影・実測図：岡山作成 写真：岡山撮影／第4図実測図1・2：中主町教育委員会 1997のp.85掲載図を加筆・修正後再トレース 写真：岡山撮影

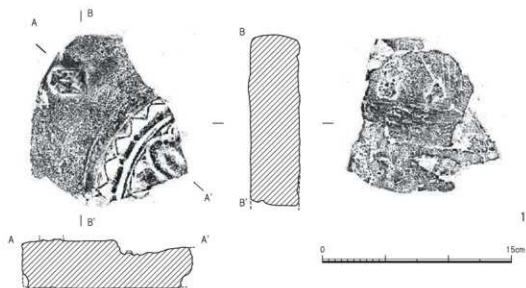




第2図 上：六条薬師堂遺跡第1次調査 瓦溜まり 出土状況 平面図
下：八夫遺跡第10次調査遺構配置図（第1遺構面）



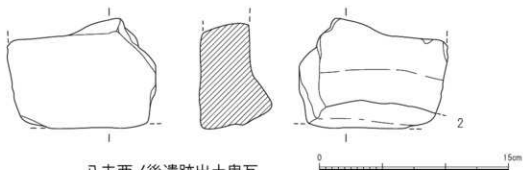
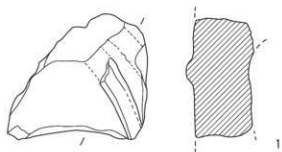
第3区 八夫西ノ後遺跡 八夫遺跡の主要遺構
野州市教育委員会2017 野州市内遺跡探検調査年報「17.八夫西ノ後遺跡探検調査報告」加藤修三



六条薬師堂遺跡出土鬼瓦

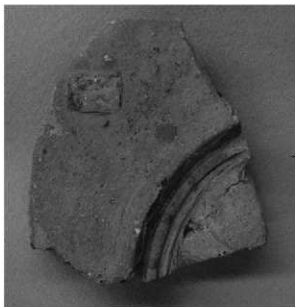


六条薬師堂遺跡出土軒丸瓦【Aタイプ】



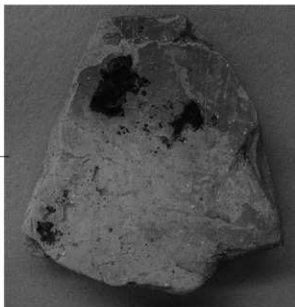
八夫西ノ後遺跡出土鬼瓦

第4図 六条薬師堂遺跡・八夫西ノ後遺跡 出土 鬼瓦



六条薬師堂遺跡 鬼瓦1

(表)

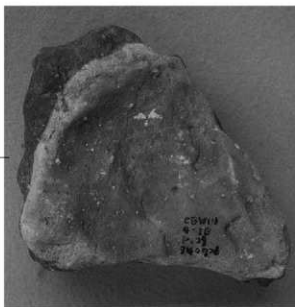


(裏)

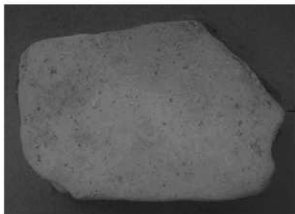


八夫西ノ後遺跡 鬼瓦1

(表)

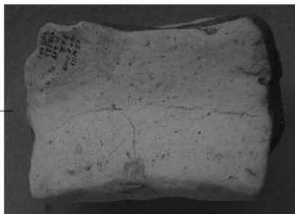


(裏)



八夫西ノ後遺跡 鬼瓦2

(表)



(裏)



六条薬師堂遺跡第1次調査 瓦出土状況



六条薬師堂遺跡第1次調査 軒丸瓦出土状況



八夫遺跡第10次調査 区画溝



八夫遺跡第12次調査 区画溝

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんど やすしぶんかざいちょうさがいようほうこくしょ
書名	令和2年度 野洲市文化財調査概要報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	野洲市教育委員会文化財保護課
編集機関	野洲市教育委員会文化財保護課
所在地	〒520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 野洲市北部合同庁舎2階 1n077-589-6436
発行年月日	西暦 2021 年 3 月

ふりがな 所収遺跡名等	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みょうこうじこくわんぐら 妙光寺古墳群	の ぞう し みょうこうじ 野洲市妙光寺	252107	343-068	35°06'11"	136°03'50"	20200610 20201111 20201118	—	
たいけんじ 台見寺	の ぞう し こ び 江 野洲市小比江 52			35°09'42"	136°01'06"	20200916	—	
に の みや じん じや 二之宮神社	の ぞう し さいがはら さん だまや う ち 野洲市西河原字宮ノ内 55 番地	252107	342-008	35°06'12"	136°6'12"	—	—	
ろくさ だう じやう だう せき 六条薬師堂遺跡	の ぞう し う じ じやう 野洲市六条	252107	342-042	35°6'43"	136°00'18"	—	—	
や ま じ り う じ じやう だう せき 八夫西ノ後遺跡	の ぞう し や ま だ じ り う じ 野洲市八夫字西ノ後 1379-4	252107	342-028	35°05'27"	136°01'26"	—	—	

所収遺跡名等	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
みょうこうじこくわんぐら 妙光寺古墳群	古墳	古墳			新たに12基の古墳を確認した。
たいけんじ 台見寺	社寺				
に の みや じん じや 二之宮神社	庭園遺構	中世～近世			
ろくさ だう じやう だう せき 六条薬師堂遺跡	社寺跡	奈良～室町			
や ま じ り う じ じやう だう せき 八夫西ノ後遺跡	社寺跡	奈良～室町			

令和2年度
野洲市文化財調査概要報告書

印刷・発行 令和3年(2021)3月
編集・発行 野洲市教育委員会文化財保護課
滋賀県野洲市西河原2400番地
〒520-2492 TEL.077-589-6436
印刷・製本 奥野印刷株式会社